森下仁丹

Press Release

2026年11月10日
森下仁丹株式会社

独自のカプセル技術で有用成分を腸へ届ける！
森下仁丹が提案する“腸活迷子”解決の鍵とは
～「腸内デザイン共創プロジェクト」参画 10 周年～

森下仁丹株式会社（本社：大阪市、代表取締役社長 森下雄司、以下「当社」）は、株式会社メタジェン（以下「メタジェン」）が運営する「腸内デザイン共創プロジェクト」に参画して2026年3月で10周年を迎えました。当社はこれまで10年間にわたり、同プロジェクトを通じて最先端の腸内環境研究や他企業との共創活動に取り組んでまいりました。10周年の節目を記念し、2026年9月9日に山形県鶴岡市で開催された「腸内デザインサロン」では感謝状が贈呈されたことを併せてお知らせいたします。



Metagen®　森下仁丹

昨今、健康のため腸活を取り入れる方が増える一方で、「自分に合っているか分からない」「取り組みの正解が分からない」と悩む方が多くいらっしゃいます。自分に適した腸活を選択するためには、単に菌を摂るだけでなく、「腸内で作り出される成分」や「菌の特性に合わせた摂取方法」という視点も欠かせません。しかし現状は、腸内細菌が作り出す有用物質「短鎖脂肪酸」の重要性や、ビフィズス菌が一般的に胃酸に弱く、生きたまま腸へ届ける工夫が必要であるという事実があまり知られておらず、これが迷いを生む一因と考えられます。当社は、独自の「シームレスカプセル技術」で菌を胃酸から守り、腸まで生きたまま届けることや、短鎖脂肪酸などの有用成分を腸まで届ける技術を活用することで、こうした課題の解決に取り組んでいます。

■腸活市場の現状と課題：“腸活迷子”を生む「短鎖脂肪酸」などの知識不足

一般社団法人 短鎖脂肪酸普及協会が主体となって2025年11月に実施した調査※1によると、2人に1人(51.6%)が腸活を実践している一方で、そのうち4割以上（43.5%）が「効果をあまり・まったく実感していない」と回答しています。

こうした“腸活迷子”が生じる一因として、「乳酸菌や食物繊維を摂取すること」自体が目的化して

しまい、腸内で重要な働きを担う「短鎖脂肪酸」に対する認知が十分でない実態が浮かび上がります（短鎖脂肪酸の産生を意識している人はわずか5.4%）。「短鎖脂肪酸（の産生）」までを見据えたアプローチと、腸内環境を適切にケアする知識の普及が不可欠です。

さらに**当社は、腸活の正解がわからないもう一つの要因として、短鎖脂肪酸を生み出すビフィズス菌などの腸内細菌が一般的に胃酸に弱く、そのままでは腸に到達する前にほとんど死滅してしまう事実があまり知られていない点にあると考えています。**

※1　一般社団法人 短鎖脂肪酸普及協会 実施「腸活・短鎖脂肪酸に関する実態調査」（2025年11月）より

■当社の腸活を支える強み：「良いものを腸まで届ける」独自のカプセル技術

現代における健康の基本は「おなか（腸）」にあると考え、長年おなかの健康に寄り添ってきた当社の最大の強みが、独自の「シームレスカプセル技術」です。 デリケートな善玉菌を、継ぎ目のない耐酸性のカプセルで包み込むことで、胃酸などから守り抜きます。実験データにおいても、カプセルで守られていない菌と比較して**人工胃液中の生存率が100万倍以上**になることが実証されています※2。 近年では、腸内細菌が産生する重要な「短鎖脂肪酸」そのものもしっかり守って届ける技術も開発しております。当社は生きたままの善玉菌や短鎖脂肪酸を腸まで届ける技術を用いて、人々の腸活をサポートしています。

※2　ビフィズス菌を空腹時に相当する人工胃液(pH1.2)中に入れ、2時間後の生存菌数を日本薬局方外医薬品規格「ビフィズス菌」の定量法により測定し、生存率を算出(当社調べ)



左：メタジェン　取締役副社長 CTO
　　山田　拓司
右：森下仁丹 研究開発本部
　　基礎研究部 部長
　　河野　麻実子

＜研究開発本部 基礎研究部 部長 河野麻実子＞

メタジェン様には、初の共同研究パートナーとしてお声がけいただいて以来、長年にわたり多大なご尽力をいただいております。「善玉菌が生きたまま腸に届き、そこでどのように働くのか」両社の知見を持ち寄ることで、腸内環境ケアのメカニズム解明が着実に進んできました。特に2022年に発表した「個人の腸内環境からビフィズス菌の働きを予測する研究成果（*Comput Struct Biotechnol J.*, 2022, 20, 5847）」などは、10年の歩みの中でも大きな手応えを感じた成果のひとつです。

腸活への関心が高まる中、一人ひとりの腸内環境に合わせた適切なソリューションを当社の技術で届ける重要性は、今後ますます高まっていくと感じています。メタジェン様との10年間の取組みで培ったこの最先端の知見と、当社のカプセル技術を融合させ、これからも世の中の『おなかの悩み』に真摯に向き合ってまいります。

■腸内デザイン共創プロジェクトにおける当社の主な歩み



＜※1　調査概要＞

・調査テーマ　：　腸活・短鎖脂肪酸に関する実態調査
・調査主体　　：　一般社団法人短鎖脂肪酸普及協会
・調査実施機関：　株式会社マクロミル
・調査方法　　：　インターネットリサーチ
・調査期間　　：　2025年11月7日～11月9日
・調査対象　　：　全国の20～69歳の男女
・有効回答数　：　2,060人
・割付条件　　：　性別・年代均等割付
（男女各1,030人、20代～60代各年代均等）